

えがお



パソコンや携帯で「伊那市えがお」を検索するか、下のQRコードから入ると、令和4年度分からこの号まで、全てカラーでご覧いただけます。



令和5年度
No.7
1月24日

伊那東小学校・東部中学校

人権同和教育講演会

「多様性と助け合いの社会を知ろう」

～きみはきみのままでいいんだよ～

猪又竜(いのまた りゅう)さん

井出今日我(いけい きょうが)さん

長野県ヘルプマーククリエイター
長野県教育委員会人権教育講師

ヘルプマーク

伊那東小学校と東部中学校で、猪又竜さんと井出今日我さんを講師にお迎えして、人権同和教育講演会が開かれました。

猪又さんは生まれつき心臓に疾患があり、走ったり重いものを持ち上げたりする等、心臓に負担がかかることはできません。井出さんは5歳の時に「筋ジストロフィー」を発症し、小学校6年生から車いすの生活になり、首からは動きません。

講演の最初に、おふたりがお金を出し合って、テレビアニメ「イナズマイレブン」の監督をされた宮尾佳和さんに描いてもらった「共生社会」のイラストを紹介してもらいました。イラストには、元気な子ども、LGBTQの方、ヘルプマーク（見た目ではわかりにくいけれど、サポートが必要）をつけている人、盲導犬を連れてくる人、おじいちゃん・おばあちゃん、妊婦さん、外国籍の人、人工呼吸器をつけて車いすに乗っている人が描かれており、様々な特徴を持った人たちが、当たり前のように暮らしている



猪又さんは会場で、井出さんは上田市からオンラインで、お話ししていただきました。

その後、自己紹介としておふたりの特徴や現在の状況等を聞きました。そして、猪又さんにも井出さんにもみんなにも、できないこともあるけれど、できることもたくさんあって、社会には健常者と障がい者の2種類の人がいるということではなく、自分と違う人がたくさんいるだけで、障がいがあるから助けるのではなく、困っているから助けるのだとお話されました。

ここで、講演会は聴いている時間から、考える時間になりました。猪又さんが重い物を運ぶように言われたらどうしたらよいか、井出さんがエレベーターのない駅で、電車に乗って旅行に行くのはどうしたらよいかというのを、近くで話し合ってから発表し合いました。様々な方法が発表された後、猪又さんは、困ったら勇気をもって助けや手伝いをお願いできるようにすること、助けることと助けられることが当たり前になると、心がポカポカ温まる社会になるとお話されました。



自分の考えやグループの話し合いについて、全校の前で発表してくれました。

最後に、ジグソーパズルには、各ピースにデコボコがあり、全く同じ形をしたピースは他になく、人によっては、でっぱりはその人ができること、へこみはできないことで、でっぱりとへこみがあるから助け合って、いろんな特徴を持つ人がつながっていきるので、きみはきみのままで、きみのできるところで誰かを助ければよいとお話されました。

ありがとう

無口な運転手さん

伊那警察署生活安全課長

赤羽 史夫 さん



全ての人が自分らしく幸せに生きる社会の素晴らしさを知り、今の自分を大切にしていこうと思ふ、ほっとして優しい気持ちになれた講演でした。

今から三十年くらい前のことになりましたが、私は大学生の時に、アルバイトでためたお金でメキシコに一月「遊学」しました。

メキシコというと、ラテン系の明るい国という印象で、食べ物だとタコスやトルテージャなど、お酒はテキーラ、歴史はマヤ文明などが有名です。

私はメキシコの明るい印象が好きだったので、「最初に海外に行く国はメキシコだ。」と一人勝手に意気込んで単身渡航しました。海外に行くのは初めての経験で、英語もスペイン語も挨拶程度、「何とかなるさ、何とかする。」と聞き直りの旅行でした。

無事に首都メキシコシティの空港に着いた私は、ショートステイをする州行きの高速バスを漸く見つけて乗り、何とか現地のターミナルへ到着しましたが、降りたバスに荷物を忘れ、大慌てで駆け戻ると、冷や汗ものトラブルが続きました。

冷や汗が何とか治まり、タクシーを探すが取り戻すと、私は客待ちしていた2台の運転手がそれぞれ私に「乗るか。」と目配せしているのがわかりました。タクシーは2台とも黄色のワゴンビートルでしたが、2人の運転手の雰囲気には違いがありました。

一人はメステイソ（インディオと白人の混血系）と思われる五十歳代の小太りの男性で、半袖、開襟シャツ、身なりは日本のタクシー運転手と違ってとても「ラフ」であり、ニコニコの笑顔でとても陽気な感じでした。

もう一人は、白人系の四十歳代の男性で、黒色の上下スーツ姿、白いワイシャツにネクタイをして、黒いサングラスを掛けていました。陽気な笑顔はなく、海外が初めての私には、「近付き難く怖い」感じの人でした。

私はその運転手よりも、やっぱり陽気な感じの運転手がいいと思って最初のタクシーに乗ろうとしたのですが、ちょうどその時に、別の人がそのタクシーに乗ってしまったのです。

やむなく、私は怖そうな運転手のタクシーに乗らざるを得なくなってしまう、かなり緊張しながらその運転手に声を掛けました。

すると彼は、空を見上げて胸の前で十字を切り、私が乗客になったことを神様に感謝したのです。私の「怖そう」という彼に対する印象は、その姿を見た瞬間に一転しました。とても敬虔な人だと思いました。そして、何よりも「有難うございます。」と感謝している彼の姿に、清らかさや高貴さのよさうなものを感じ、感動したのです。

彼は無口で車内でも会話はなく（あっても私は困ったと思いますが）、実際のところは果たして無事に着くか不安と心細さで一杯だった一方で、彼のことは滞在中ずっと忘れられなくなりました。強い信仰心を持つ人の敬虔な姿が私の目に焼き付いたのです。彼にしてみれば日常的な行為だったのでしようが、私は、自分にそのような心掛けがないことを痛感し、自分が何となく「惨め」にも思えてしまいました。ですが、この時の気持ちは単なるセンチメンタルな旅の思い出以上となっています。

大学を卒業して警察に入り、本当に色々な立場の人たちの様々なトラブルに対応してきました。その経験から、どんな人とも「感謝の気持ちを通わせ合うこと」はとても大切だと実感しています。

「感謝」は、「有難い」と感じる気持ちの自然な発露です。本来はなかったかもしれないことがあったのです。「ありがとう」は、「それがなければ幸

せじやなかった。」から言える大切な「感情表現」だと思えます。

何もかも全てが一人で出来て、強く生きていける人はいないはず。ほとんどの人は、それぞれに濃淡ある人間関係を作り、バランスを何とかとって生きています。トラブルの背景の一つには、お互いに「感謝していない。」「感謝する気も事もない。」という「冷たい現実」があるように思います。それは程度の違いありますが、人間関係の濃淡によって、意識されることもなくあるのです。

メキシコ遊学もあのタクシー運転手のお陰で遊んで終わったわけではないと勝手に自己満足しています。旅を通じ、「感謝しないことに無自覚ではないけない。」と思うようになりました。今でもあの運転手の姿が脳裏に浮かぶのは、彼が「感謝すべきことを疎かにしてはいけませんよ。」と教えてくれたからだと思っています。

セニョール無口な運転手さん、グラフィアス（ありがとう）。

西春近公民館人権同和教育講座 障がいって何でしょう？



長野県飯田養護学校
校長 浦野憲一郎 先生



西春近公民館人権同和教育講座が講師に飯田養護学校の浦野憲一郎校長先生をお招きして開かれました。

はじめに、障がいの種類やそれに応じて設置されている特別支援学校についてお話していただきました。養護学校の他に盲学校、ろう学校を含めて、県下の特別支援学校は現在20校に増え、通学の利便性の向上やセンター的機能の充実のために、分教室も各地の小中高等学校に増設されてきました。

浦野先生がお勤めの飯田養護学校は、192人の子どもたちが楽しく学び、小学部・中学部・高等部・あおぞらグループ・訪問教育のそれぞれ部で、様々な学習活動が展開されています。また、地域の番木第1小・第2小・番木中との交流の話題や高等部が相撲交流会のボランティアに行ったり豚汁を配るなどのお手伝いをして感謝されたという話題も紹介していただきました。



音を小さくする「イヤマフ」をつけたり、軍手をして紙を数えたりする体験の様子です。

その後、川崎フロンターレが制作し、中村憲剛選手が出演している発達障がいの子どもたちの見える方・聞こえ方や支援の仕方を紹介した動画を見たり、イヤマフをつけての聞こえ方や軍手をして紙の枚数を数える体験をしたりしました。

最後に人権作文コンテストの中学生の作品から「周囲が障がいを持つ人に適応できずに生まれる不都合が本質的な障がいだと思う。」等の言葉を紹介され、「障がいは、もしかしたら社会が作り出しているものでないか、そうだとしたら私たちは何ができるのか考えていただけたらいいな」と思ってお話をしました。」と締めくくられました。

高遠高校英語部と高遠小 学校5年生との交流会



高遠高校英語部の4人の生徒の皆さん、顧問の堀先生、ALTのメリー先生は、高遠小学校の5年生の皆さんと恒例の英語交流会をおこないました。この交流会は、高遠高校英語部が、外部への発信や交流を目的に7年前からはじめられたということです。

元気いっぱいの自己紹介からはじまり、英語部員とメリー先生とで考えたクリスマススイズが、全て英語で

出題され、児童の皆さんは各班に入った高校生の助けを借りながら協力して答えを考えました。その後ビンゴゲームをやり、最後にはお菓子ももらいました。

小学生からは、「とても楽しかった。英語はだいたい分かった。」、高校生からは、「5年生の皆さんが楽しそうでよかった。」、堀先生からは、「生徒が児童の皆さんとかかわる姿がよかった。」という感想が聞かれ、参加した皆さんがそれぞれ満足感や充実感を得ることができた素敵な交流会になりました。



メリー先生がクイズを出題して(上)、グループで相談して答えを伝えます(下)



45分があつという間に過ぎて終わりの時間になりました。(上) お菓子をもらって大満足!(下)



中学生の自習室2024冬



1月4日・5日に、伊那、美篁、西箕輪、西春近、高遠(5日のみ)の各公民館では、中学生の自習室が開かれ、全体で延べ79人の生徒が参加しました。

参加した生徒さんの感想を紹介します。

○休み中はダラダラと過ごしてしまい、勉強に身が入らなかったのですが、今回初めて参加して先生たちも優しく、集中して取り組めました。

○家だと、やらないといけないのはわかっているけど、午

前中はだらけてしまうから、午前中から効率よく静かに集中して勉強ができてすごくよかったです。○落ち着いた雰囲気の中で勉強することができたので、軽食もガッツリお昼ご飯になっているのに無料はとてありがたかったです。



(上)みんな集中して学習に取り組んでいました。(下)1日目のお昼はカレーライスでした。



伊那市人権同和教育講座講演会

「ネット・スマホが変える子どもたちの育ち」



保育協会との共催による人権同和教育講座がニザワいなかセホールで開催されました。



石川さんは、「授乳アプリ」や「絵本アプリ」の利用により乳幼児期の親子の繋がりが希薄になっていることや小中高生

のスマホ・ネット利用の長時間化、オンラインゲームの誘導や課金の実態、不特定多数の人とのつながりを巧妙に継続させる「斉藤さん」というアプリ、いじめのチャットや動画等、デジタル社会の問題点やその対応の仕方についてお話していただきました。また反対に、オンライン学習サイトや奨学金サイト等の役立つ情報や将来のために培う力も紹介していただきました。最後に、「大人が苦勞して生きて培ってきた人としての力で、子どもたちに温かい言葉をかけ、心と心で繋がってほしい。」と講演を締めくくられました。